

連載 プロマネの現場から

第78回 ブリュエール『子供の遊戯』

蒼海憲治(大手SI企業・金融系プロジェクトマネージャ)

今年は一足早い夏休みをいただき、6月末にオーストリアのウィーンとザルツブルグに行ってきました。目的は、本場のオペラやクラシックのコンサートを楽しむことでしたが、コンサートの多くは夕方からなので、日中時間帯は、ハプスブルク家とその権力と財力で集めた多くの美術品を見るため、美術館巡りをしました。

美術館巡りの中で、一番収穫だったのは、美術史美術館で、ピーター・ブルューゲルの作品をまとめて見ることができたことでした。この美術史美術館では、ブルューゲルが生涯に残した油彩画50点余のうち、『バベルの塔』『農家の婚礼』『雪の中の狩人』『農民の踊り』『子供の遊戯』等、14点を見ることができます。この中で特に、目に留まったのは、子どもたちが様々な遊びを画面のここかしこで繰り返している『子供の遊戯』でした。

ブルューゲルが、1560年に描いた『子供の遊戯』には、総勢246人にも及ぶ子どもたちがいます。一方、それに対する大人は二人のみ。この絵のなかに、「馬跳び」「輪まわし」「お手玉」「竹馬」「木馬」「かくれんぼ」「鬼ごっこ」「独楽まわし」「めんこ」など、84種類とも86種類とも91種類ともいわれる遊びが表されています。

その中で、遊びの種類を最多の91種類と捉えられている森洋子さんに、『ブルューゲルの「子供の遊戯」—遊びの図像学』（*1）があります。森さんは、この労作において、一枚の絵を徹底的に解明しています。

この絵の中には、2、3歳の幼い子供の独り遊びから、14、15歳の少年少女たちのグループ遊びまで、約250人の子供が、91種類の遊びに没頭している姿が描かれています。

ブルューゲルの研究者R・ヴァン・バステラールとH・ド・ローは、この作品を「フランドルの子供の遊びが描かれた真の百科全書」と評しています。

舞台となった1560年当時のアントワープ（現地語でアントウェルペン）は、人口10万人以上の国際貿易都市として、パリ、ヴェネツィア、ナポリに次ぐ世界第四の都市に発展していました。

当時の時代背景としては、子供期は16、17世紀まで存在せず、子供の法的保護もなかった。子どもは小さな大人として、共同体の中に組み入れられていたということでした。このことは、日曜歴史家として名高いフィリップ・アリエスが『<子供>の誕生』の中で明らかにしたことで、17世紀になってはじめて大人と子どもの明確な区別、子供期が成立すると同時に、「遊び」も発見されたのでした。

『子供の遊戯』には、実に、たくさんの遊びがあったことに驚きます。

- 1 お手玉遊び
- 2 人形遊び
- 3 人形の家
- 4 祭壇ごっこ
- 5 梟の巣箱
- 6 水鉄砲
- 7 仮面遊び
- 8 ブランコ遊び
- 9 くるみの風車遊び
- 10 シャボン玉遊び
- 11 小鳥遊び
- 12 ガラガラ遊び
- 13 石が脚にあたるぞ
- 14 洗礼ごっこ
- 15 目隠し鬼ごっこ
- 16 子供椅子
- 17 「いくつもっている」または「奇数か偶数か」
- 18 棒馬
- 19 子守りごっこ
- 20 ロンメルポットと縦笛
- 21 お粥のかきませごっこ
- 22 輪回し（男子用）
- 23 輪回し（女性用）
- 24 樽栓の穴から叫ぶ
- 25 シーソー（樽揺らし）
- 26 風船（豚の膀胱）遊び
- 27 尻打ち
- 28 牡山羊、牡山羊よ、ふらつくな
- 29 お店屋さんごっこ
- 30 ナイフ立て
- 31 煉瓦積み遊び
- 32 髪の毛むしり
- 33 昆虫を捕まえる
- 34 ヴォラールト運び

- 35 帽子、帽子を脚の間から
- 36 兎跳び
- 37 線の上での引っ張りだこ
- 38 足蹴り
- 39 噛みタバコ転がり
- 40 梨の木になる（逆立ち）
- 41 でんぐり返し
- 42 柵をよじ登る
- 43 柵の上でお馬乗り遊び
- 44 花嫁行列ごっこ
- 45 目隠し鍋たたき
- 46 低い竹馬
- 47 目隠し鬼のスリッパとり
- 48 ひと山に当てる、塔にむかって投げる
- 49 ぐるぐる回り
- 50 高い竹馬
- 51 ぶらさがり（横木に回転する）
- 52 棒立て（バランスごっこ）
- 53 肥った仔牛、または袋のかつぎっこ
- 54 投げ独楽
- 55 鞭独楽
- 56 私の青い塔の中に誰がいるの
- 57 カタカタ鳴らし 「鳴子」
- 58 風車で槍合戦
- 59 穴掘り
- 60 砂山へ駆け登る
- 61 砂山から駆け降りる
- 62 スカートを膨らませる
- 63 木登り
- 64 浮袋（豚の膀胱）で泳ぐ
- 65 足を水に浸す
- 66 川辺から泳ぐ
- 67 泳いだ後で
- 68 ボール遊び
- 69 おしっこ
- 70 指骨遊び

- 71 短棒投げ
- 72 ボールを穴の中へ
- 73 小猫ちゃん、小猫ちゃん、王様の椅子、または王様の退位ごっこ
- 74 地下室の扉を登る
- 75 取っ組み合い
- 76 壁さんに玉をぶつける
- 77 宗教行列ごっこ
- 78 ねずみの尻尾ごっこ
- 79 訪問ごっこ
- 80 先頭の子供に従え
- 81 ベンチから押し落とせ
- 82 馬ちゃん、牛ちゃん、仔牛ちゃん
- 83 ボール隠し
- 84 馬のベヤールとヘーム伯の4人の子供たち
- 85 洗礼者聖ヨハネの祝火
- 86 焚火運び
- 87 松明運び
- 88 戸口の前で歌う
- 89 散歩
- 90 吹き流しをなびかせる
- 91 籠をぶらさげる

この91種類の遊びの名称は、ベルギーの民俗学者ド・メイヤーによるオランダ語名からの翻訳によるもの。名称だけだとイメージしにくい遊びも多いのですが、「ごっこ遊び」が10ほどある一方、「足蹴り」「髪の毛むしり」「尻打ち」など一見いじめにも見える罰ゲームが5つほど入っているのが印象的です。さくの横に2列にすわっているのは「足蹴り」。ゲームに負けたふたりの子に、真ん中を歩かせて、足を蹴る。右端の丸太の前には、男の子が5人の子供から髪の毛を引っ張られている。その手前には、みんなからよってたかって材木の上におとされそうになっている。その隣の砂場では、左側の男の子は、ナイフを口にくわえている。理由は、ナイフを上手く地面につきさせなかったので、罰として口でナイフを拾いあげさせられたため。

ところで、この遊びのうち、7割ほどは、いまのフランドルの子ども達もわかるのだそうです。ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』(*2)の冒頭に、「遊びは文化よりも古い」とあります。動物は人間に教えられずとも遊んでいるし、人間の共同社会が成立する以前から遊びは存在した。だから、500年前の遊びがいまでも残っているのは驚くには当たらないのかもしれない。

「遊び」論を展開したり、その適否を判断する知見は持ちあわせていないのですが、『ホモ・ルーデンス』を読んでいると、「遊び」が持っている役割を再認識させられます。

≪すべての遊びは、まず第一に、何にもまして一つの自由な行動である。

命令されてする遊び、そんなものはもう遊びではない。≫

≪遊びはものを結びつけ、また解き放つのである。

それはわれわれを虜にし、また呪縛する。それはわれわれを魅惑する。≫

≪遊びの領域のなかでは日常生活の掟や慣習はもはや何の効力ももっていない。

われわれは「別の存在になっている」のだし、「別のやり方でやっている」のだ。≫

そして、ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』が解明した遊びの研究を受け継ぎ、遊びの体系的な分類をしたのが、ロジェ・カイヨワになります。カイヨワは、『遊びと人間』(*3)において、こういいます。遊びの種類は無限である。しかし、不毛か生産的か、危険か健全かは問わず、遊びを支配する原則は、風土において常に一定である。

遊びは、4つの基本的範疇、根本的動機に分かれる。

- ・競争
- ・運に身を任せること
- ・模擬あるいは表現
- ・眩暈と失神

ズバリこの4つだ、と。この明快さは、読んでいて心地よいです。

ところで、古典となっているホイジンガやカイヨワの理論を基に、遊びの原因として、「剰余エネルギー説」「本能説」「準備説」「気晴らし説」「代償説」「浄化説」「発達説」「学習説」など、遊びを裏付けるさまざまな理論が提唱されているのですが、すべての遊びを説明しうる統一した遊びの理論はありません。でも、このことは、ややもすると、「遊び」にまで、効率や効用を求めがちになってしまうことを自省する気づきにもなると思います。

ところで、『子供の遊戯』を描いたブリュウゲルは、43歳でなくなっており、その墓碑銘には、ラテン語で「人生のなかばで死んだ」と記されています。また、ブリュウゲルには、逆立ちをしながら死んだ、という言い伝えがあります。ブリュウゲルは、ブリュッセルの町を逆さに見ようと、壁を背に逆立ちした。そして『やあ、いいながめだ』といったとたんに死んだ、と。

そんなブリュウゲルは、世の中を斜めならぬ「さかさま」に捉えてみていたのかもしれませんが、『子供の遊戯』自体、大人がみな町からいなくなり、子供たちだけを残した不思議な世界になっ

ています。

「遊び」の意味の一つに、「ハンドルの遊び」といったように「機械などで、急激な力の及ぶのを防ぐため、部品の結合にゆとりをもたせること」があります。『子供の遊戯』を見ながら、ブリュウゲルに倣って、たまには「さかさま」に物事を見直す機会を持つことが、「ゆとり」を持つ意味でも大切なことだと思ふのでした。

(*1) 森洋子『ブリュウゲルの「子供の遊戯」—遊びの図像学』未来社、1989年刊

(*2) ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』訳・高橋 英夫(中公文庫)

(*3) ロジェ・カイヨワ『遊びと人間』訳・多田道太郎、塚崎幹夫(講談社学術文庫)